

通信シルバー秩父

平成27年9月18日号

大盛況 シルバーまつり開催

第8回シルバーまつりが9月6日に開催されました。心配された雨も午前中は降らなかつたため、午前9時の開始から、多くの人が訪れ、出店・バザーは大繁盛で午前中にはほぼ完売状態となりました。入場についても一時、駐車場の制限を行わなくてはならないほどの賑わいとなりました。



開会式では、久保清実行委員長に続き、久喜邦康理事長、笠原宏平市議会議長からご挨拶をいただきました。また、ご来賓

として、松澤一雄副議長をはじめ、浅海忠、江田治雄、赤岩秀文、黒澤秀之、大久保進、福井貴代各市議会議員、小暮俊明秩父公共職業安定所長、深田正藏（日野田町）、長谷川愈（旭町）、堀澄夫（上野町・代理）各町会長、松本直子高齢者介護課長にもご出席いただきました。

余興芸能会場では、大正琴、フラダンス、民謡、リズム体操、軽音楽、コーラスのほかヒットポップダンス、玉すだれ、むつごろう踊り、津軽スコップ三味線などユニークな演目まで飛び出し、満員のお客様に最後まで楽しんでいただきました。



今年も横瀬町の青少年相談員の皆様のご協力により、ちびっこコーナーを設置していただき、多くの親子づれのお客様にも楽しい時間を過ごしていただきました。



また、親睦会主催のバザーへのご協力ありがとうございました。売上金は市の社会福祉事業に寄付させていただきます。



会員皆様の結集した力により、第8回シルバーまつりは、出店・バザーの完売、余興芸能での満席など例年にも増して多くの市民の参加のもと、にぎやかなイベントとなりました。

シルバーマンパワーにあり

新会員紹介

次の方たちが新しく仲間になりました。

七月

市川和男 島崎一男 加藤力
石井光一郎 栗原三郎
串田マスノ

八月

青山愛子 新井清久 富田文作
深田敬子 三友幸三 黒澤孝子
中畦伊三郎 中畦美都子

職員の異動

9月1日付け退職者の補充のため、次のとおり人事異動を行いました。

〔退職〕 金井貞雄

〔採用〕 逸見初江

（吉田事務所 パート）



保育サービスクラス開催

秩父ファミリー・サポート・センターでは10月1日から11月26日まで9回に渡り保育サービスクラスを開催します。シルバー会員の方で、子育てに困っている保護者に代わってお手伝いをしてほしい・孫の子守をしていて最近の子育てを勉強したい、など少しでも興味をお持ちの方はぜひご参加ください。詳細は事務所にお問い合わせください。

囲碁・将棋クラブ 日程

9月20日(日)、11月15日(日)
12月20日(日)

多数の方の参加をお待ちしています。

会場 福祉女性会館第5会議室

(和室)

時間 午後1時～5時

☆会員募集中 日程の日にご集ってください。初めての方も、この機会に始めませんか。

親睦会旅行の集金について

10月7日(水) 予定の秋の日帰り旅行に参加する方で、まだ、会費八千円を未納の方は、次のとおりご持参ください。

日時 10月1日(木)

午前10時～午後3時

受付 シルバークラブハウス

南小児童に伝統の継承を 秩父音頭を指導



事業委員会では、会員有志の参加のもと、秩父音頭の伝統を後世に伝えたいとの思いから、本場皆野町から講師を迎え練習を重ねていました。

9月4日には、その練習の成果を基に、南小学校児童に秩父音頭の指導を行いました。指導は、10日、11日及び15日の計4回を数えました。

児童たちは、秩父音頭発祥の地の本格的な踊りを熱心に学んでいました。この成果は、9月19日に開催される同校運動会で発表されます。

会員だより

絆を紡ぐ

亡き母二十七年目の夏に思う

小林靖男

かつてNHKの連続テレビ小説「梅ちゃん先生」を見ていて、戦災で荒廃した庶民生活の姿がリアルに再現され、今の社会環境が失った地域の「絆」を強く感じさせてくれた。

戦火で焼け出されたバラック生活の場面では、当時、父の復員を待つ家族四人の生活は、何時しかタイムスリップして、国民学校五年生の私へといざなった。また、その光景は今も亡き母に見せたい彷彿の思いに胸が熱くなった。

ある時、警察と名乗る人物に調べられ、母の手荷物から僅かばかりのお米が没収(略奪)された事があった。

戦時中は、国策として国民には我慢と耐えることが美德とされ、「欲しがりません。勝つまでは」のフレーズで耐乏生活が強いられた。

そこで敗戦となると、なりふり構わず、自分の欲望がからみ、窃盗が横行し、治安の悪化がこれに拍車をかけた国難の時代で

「絆」などとはどこ吹く風であった。しかし、離散家族(我が家)では、強い「絆」を求め、地域では「助け合い運動」が芽生えてきた。私たちを「警察だ」として騙したその人も「自分達家族のため」との思いを恥じ、更生されていると思うと人の心を信じたくなる。

国民学校五年生の私には、今でこそ「絆とは」を考えられる年代にあるが、当時は「なぜ? どうして?」の疑問を残し、初冬のとぼりの降りる庭で母の膝に顔を埋めた思いは、今も心の歴史の中で生きています。

昨年、支援物資を持って被災地を訪れた時、「ありがとう」という喜びの声を聞く度に「心の絆」を感じることができた。

東京生まれで横浜育ちの私も齢七十七歳の後期高齢者であるが、これからも健康に感謝し、「心の絆」を紡いで行きたい。

素晴らしい人生の糧を「ありがとう」

会員だよりの原稿を募集します。趣味、スポーツ、旅行、就業、ヒヤリハット等なんでもかまいません。字数は、800字程度まで、原稿を事務所までお持ちください。